

エビデンスと経験が紡ぐ未来の産科診療

—科学的探究がもたらす新たな視点—

企画者のことば

近藤英治

産科では経験則に基づいた診療が重視されてきました。長年の臨床経験に裏打ちされた判断は確かに実践的かつ有益です。しかし、経験に依存する診療は主観に影響されやすく、ときに患者に不利益をもたらすこともあります。診療の質をさらに高めるためには、産科診療においても、科学的・客観的に事象を捉える姿勢が欠かせません。

産科領域では、信頼度の高いエビデンスを得ることは容易ではありません。質の高い医療を実現するためには、単にガイドラインを遵守するだけでなく、その背景にあるエビデンスを深く理解し、必要に応じてガイドラインの改訂につながる新たなエビデンスを創出する努力が求められます。日々の診療において、「なぜこのような診療を行うのか」「本当に最適な診療なのか」という問いを意識し、既存のエビデンスを検証しながら根本的なメカニズムを探る姿勢は、新たな発見と診療の喜びをもたらしてくれるでしょう。

産科診療には、ブラックボックスが多く残されています。経験と科学的エビデンスを融合させ、こうした未知の領域の謎を解明し、最適な医療を確立することは今後の重要な課題です。本企画では、日々の診療から生まれる疑問を科学的な探究心で追究し、その知見を臨床に還元して診療を実践されている先生方に、その根拠と診療の実際をご紹介いただきます。この特集が、読者の皆さんの知的好奇心を刺激し、産科医療における新たなエビデンス創出の一助となることを願ってやみません。